

# 彼氏とうまくいかない夜、知らない男に抱かれた。 寂しかっただけなのに 【体験版】

白石美優、二十六歳。付き合って二年になる彼氏がいる。嫌われているわけじゃない。別れ話をされたわけでもない。それでも最近、少しずつ距離を感じていた。

『今日、少し電話できる？』送ったメッセージには既読がついている。けれど返事はなかなか来なかった。ようやく届いたのは、短い一文。

『ごめん、今日疲れてる。また今度』

最近、彼はいつもそうだった。会いたいと言えば忙しい。電話したいと言えば疲れてる。少し寂しいと言えば、「考えすぎ」と笑われる。付き合い始めた頃は違った。仕事帰りに電話をくれて、「今日どうだった？」って聞いてくれて、寒い日は迎えに来てくれた。ちゃんと、愛されてると思っていた。

でも今は違う。同じ部屋にいてもスマホばかり見ている。話しかけても、返事はどこか上の空。抱きしめてほしい夜ほど、「眠い」と背を向けられる。嫌いになったわけじゃない。でも、前みたいに求められていないことだけは、痛いほどわかってしまった。

その夜。美優は友人との飲み会帰り、一人で駅へ向かっていた。濡れたアスファルト。雨の匂い。終電間際の街。バッグの中からスマホを取り出す。彼からの連絡は、まだない。わかっていたのに、期待していた自分が惨めだった。

「……寂しい」

思わず零れた言葉。その瞬間だった。

「大丈夫ですか？」

低く、落ち着いた声。顔を上げると、一人の男が立っていた。黒いジャケット。穏やかな目。少しだけ疲れたような表情。

「少し、ふらついていたので」

知らない男。本当なら、警戒するべきなのに。

「無理してるように見えました」

その言葉に、美優の胸が小さく揺れた。彼氏にも気づかれなかったことを、初めて会った男に見抜かれてしまった。

「近くに、まだ開いてるカフェあります」

強引じゃない。距離も近くない。でも、その優しさが 今の美優にはあまりにも沁みた。帰らなきゃいけない。わかっているのに。

「少しだけ……休みたいです」

気づけば、そう答えていた。深夜のカフェ。静かな雨音。そして、“寂しかっただけ”のはずだった夜が、少しずつ壊れ始める。

続きは本編でお楽しみください。